vācārambhaṇaṁ vikāro nāmadheyam

後藤敏文

一目次一
1. 問題概観
2. 名詞構文のスインタクス上の問題
3. 複合語 vācārambhana- の解釈
4. 結論
5. 付録：現代語諸訳一覧

一注の内容抜粋一
注2 ādesa-
注5 vi kr, vyā kr
注6 dhā
注8 “Philosophen-Kompositum”
注9 rabh/labh に於ける二次的 -m- の起源
注10 rabh/labh と rambh 「よりかかる」（??）

1.1. Upaniṣad 文献に名高い Uddalaka Āruṇi の教説（Chandogya-Upaniṣad VI）中に現れる vācārambhaṇaṁ vikāro nāmadheyam（2ヶ所合計7回）の解釈をめぐっては、古くから諸説があった。この事情は最近の翻訳を見ても変わっていない。

Uddalaka Āruṇi は万物をいわば質料因から捕え、その本質を唯一の（根源的）实体たる「有」、およびそれから派生する3要素（熱 tejas, 水 āpas, 食物 annam）の構成に帰するが、哲学の具体的内容に立に入り先立ち、彼の視点の何如なるもののかをたとえによって息子の Śvetaketu に示す（VI 1,1一7）：yathā sōmyaikaṁ mṛtpiṇḍena sarvaṁ mṛnmayam vijñātaṁ syād vācārambhaṇaṁ vikāro nāmadheyam mṛtipiṇḍasya sarvesu satyam 「たとえば、我が子よ、一つの土団子によって全ての土製のものが認識されたことになろう。vācārambhaṇaṁ vikāro nāmadheyam。『土』というのだけが真理なのだ」（VI 1,4）。同様に、銅の飾り玉：銅（VI 1,5）、爪きり：鉄（VI 1,6）、更に本論中にも火・太陽・月・
稲妻を例として vācārmbhaṇaṁ vikāraṇaṁ nāmadheyaṁ の表現が用いられるが、そこではこれに続いて trīni rūpāṇītya eva satyam 「三つの形（熱・水・食物）だけが真理なのだ」（Ⅷ 4,1-4）と結ばれている。

1.2. この文の主旨は例えば壷・皿・鍋瓦といった個々のものは実は土が形を変えた物にすぎない、というのであるから、極く自然な訳としては、第一に、『変異は [ 唯] 言語による把握（= 言彙上の区分）なり。即ち名義なり』（辻、ヴェーダとウパニシャッド、1953，p.219, p.221），あるいは "Die Umgestaltung (d.h. z.B. ein irdener Topf) ist ein (sekundäres) 'Be-greifen' mit der Sprache, eine Namensgebung" （Hamm, WZKSO 12/13，1968，p.150）が考えられる。この際、vācārambhāṇaṁ という単語の意味の解釈はひとまず置くとする。主語が vikāra- であることは特異な見解を提出した Van Buitenen も基本的には疑っていない：In the first sentence of our phrase vikāraḥ must be the logical subject (Il J 2, 1958, p.301, cf. p.295 注4)。vikāra- が「変容・変様すること、させること、変容・変様したもの」（Umgestaltung，Umwandlung，Veränderung）を意味し、今文脈では結果として個々の物を指すことは改めて用例を引くまでもない。ただし、van Buitenen は - 一名詞構文の主語は文末に来るという考えを前提としているのであろう — 文を vikāra の後ろで区切り、nāmadheyaṁ ... ity eva satyam を一つの文（彼にとっては phrase）と解釈する。他には Böhtlink，岩本の訳がこの様に文を区切る。しかし，nāmadheyaṇa で新しい文が始まるとした場合、「土/錫/鉄という nāmadheyā- こそ真実なのである」等の謂となるが，nāmadheyā- はもともと 'das Namen-Geben，das Namen-Bestimmen'「名付け」，"<"更に普通「名，名称」の意味で用いられ（cf. Altindische Grammatik Ⅱ 2 p.827），ものの背後にある質料として考えられている土・錫・鉄，ないし三構成要素 trīni rūpāṇī（＝tejas，āpas，annam）のことを言うよりも「土団子」・「錫の飾り玉」・「爪先り」，ないし「火」・「太陽」等々といった個々の変景物の「名称」（cf. nāmarūpa-「名称と形態 [= 個物]」，注 5 の引用箇所をも参照）にこそ相応しい，という問題がある。（Schayer, Zeitschr.f.Buddhismus 3, 1921, p.244 及び同 4, 1922, p.220 をも参照すべし。）#nāmadheyaṁ...ity satyam #という語順も必ずしも自然とは思われない。そもそも，次節に見る如く，文を vikāra の後ろで区切らねばならない理由は無いのである。

2.1. 上述の如き自然と思われる訳（辻，Hamm）を離れて多様な解釈をもたらすに至った主な原因の一つは vācārambhāṇaṁ 以下の三つの名詞の語順につき，スタンダラス上の関係が明らかでなかったからである。Hamm は P.50 注8 に vikāraḥ が主語，
vācāṁbhaṇaṁ と nāmadheyaṁ は述語名詞とのみ断言し、説明を加えていない。また、この様々な単純でない名詞構文については、スインタクスに関するこれまでの諸研究も扱っていないようである。しかし、Hamm の断定に根拠のあることは同じ章の ChU VI 8, 4 sanmūlāṁ somyemāṁ sarvāḥ prajāḥ sadāyatanāḥ satpratiṣṭhāḥ により名義かつ十分に支持される。即ち、この文は「これら全ての生類は、がま子よ、有を根とし、有を拠点とし、有を本居の場としているのである」としか解せない。imāḥ sarvāḥ prajāḥ が主語、先頭の sanmūlāḥ が述語、更に文末の sadāyatanāḥ 及び satpratiṣṭhāḥ がそれぞれ述語の同格として補足説明・限定をなし。即ち、Vokativ（他に多く例があるように、文の二番目に置かれている）を除いて、述語－主語－同格述語（より同格述語 2 という語順は標準的であり、この語順に合わない場合こそ文中のいずれかの要素が特に強調された特殊な語順であると判断される。）→ Puruṣasūkṛta 30, 4 に satpratiṣṭhāṁ pūṇitaṁ sanāśayāṁ sahārayāṁ

2.2. もし、vācāṁbhaṇaṁ が nāmadheyaṁ を修飾する形容詞であると考えるならば（Max Müller, Radhakrishnan, 辻1959, Mehlig, vācāṁbhaṇaṁ は「ことばを拠り所とする、ことばに依存する」を意味する Bahuveli であり、かつ、被修飾語（nāmadheyaṁ）の直前ではなく文頭に置かれていることから、特に強調されたものと解釈される。（この、形容詞が文頭に被修飾語と離れて置かれる語順について、今相応しい例を挙げ得ないが、Ickler, Untersuchungen zur Wortstellung und Syntax der Chandogyopanishad, 1973, p.98付近参照。）この場合、ことばに依存しない名というのが考え難く以上、何故強調されたのかが疑問となろう。しかし、結論問題は vācāṁbhaṇaṁ の語の解釈と関わってくる。


この語が複合語であることは最早自明としてよいであろう（cf. Kuiper, IIJ 2 p. 306ff., 異論は例えば Schayer, Zeitschr.f.Buddhismus 3, 1921, p.244 注 2。）問題は(1) vācā が格形(Instrumental)か、二次的な語幹形か、(2) ārambhana- が「捕まえること」(あるいはそれから派生する「始め」、「従事・活動」など)か、「拠り所」か、の二点に関連した二点に要約される。互に関連するというのは、例えば Kuiper が vācā を Pākrit 形に基づく二次的語幹と主張する背景には、彼が始めから ārambhana- の意味を
「つかまえる」は別起源の「挿り所」であると考えていたという事情がある(cf. "This possibility ['beginning' 乃至 'a hold'] I have overlooked in my former paper" IIJ 2 p.309)。「ことばによる (Instr.)挿り所」というのはそもそも考えがたく、arambhāṇa-が「挿り所」を意味すると仮定するならば、「ことばに依存する」という Bahuvrthi か (cf. 2.2)、「ことばの挿り所 (ことばが依拡するところ)」(HERTEL の訳参照)、乃至「ことばへの依存」(OLDENBERG, GELDNER; 但し arambhaṇa-に「依存すること」という意味での実例は他に無いと思われる)と理解させざるをえない。「ことばによって捕まえること・言語による把握」(SCHAYER, OERTEL, 辻 [ヴェーダとウパニシャッド, 1953], DEBRUNNER, Thieme, 岩本, HAMM, 服部)と解釈する場合には(1)に挙げた二つの選択肢は理論的にはどちらも可能である。vācā が語幹であれば「ことばを捕まえること・使うこと」(cf. VAN BUITENEN “taking hold of vāc”) という解釈も成り立ち得る。

3.2. vācārambhāṇa- が「ことばによる把握」であり、vācā が Instrumental であるという見解は OERTEL, Zu den Kasusvariationen in der vedischen Prosa II (SbBAW 1938-6) p. 8 注 2 にはっきりと述べられている。Rgveda X 125.8 は、すでに指摘されているごとく (COOMARASWAMY, HJAS 1, 1936, p.61 注 38 [KUIPER, IIJ 1 p.159 注 18 による], DEBRUNNER, AiG II 2, Nachträge p.72), 「ことばによってものを捕える」という表現形式が実際に古くからあったことを証左する:

ahām eva vātā iva prā vāmy
ārābhāmaṇā bhūvanāni viśvā

「我 (=Vāc-) こそは風の如くに吹き進む、
全ての諸世界を捕えつつ」。

そして、より具体的には、OERTEL loc. cit. の引用する Śatapatha-Brāhmaṇa XIII 2, 4, 1 (vācā hy ārābhante yādyad ārābhante 「人々が何にせよものを捕えるのは、ことばによって捕えるのだから」. OERTEL の引用はやや不正確), Pañcaviṃśa-Brāhmaṇa IV 3, 3 および Gopatha-Brāhmaṇa I 5, 4 によって支持される。

3.3 複合語の前肢に語幹 vāc- ではなく (その場合 Sandhi によって vāgārābhāṇa-が期待される), Instrumental vācā が用いられるのは文法的に必ずしも第一に求められる形ではないかも知れない。しかし、十分考えられる可能性は「挿り所」(RV-Br.)ではなく「把握」、それも「ことばをつかまえること」ではなく「ことばによって [ものを] つかまえること」という意味をはっきりさせる為には Instrumental が好ましかったということである。それでなくとも哲学者が表現の厳密を期する為に、必ずしも文法的に、あるいは語法的に一般に適用していない形を強いて用いること、それも、人工的な
複合語を創出して用いることは、古今東西を通じて多く見受けられる。成程KUIPERがEpik、Purāṇa、後期のSanskritの、特に複合語の前肢に、稀かつ変則的に現れるvācāの例を挙げて主張する如く、一種のPrakrit形を基に（Prakritでの子音語幹の衰退に伴い、女性名詞では-a-, a-語幹への移行がみられる。Cf. PISCHER §413; 例えばpāli vācā-), vāc-（vāg°）のかわりに二次的語幹vācā-が用いられたという可能性が無いとは立証できないであろう。Chāndogya-Upaniṣadには他にも日常言語からの影響が見られること、既に数々指摘されている通りである（KUIPER、IIJ 1 p.156 注4，IIJ 2 p.308ff.の挙げる文献参照）。しかし、この件に関して示唆に富むのはむしろKUIPER（IIJ 2 p.307）が単に孤立した例として片付けたvācā-stena-「ことばによって盗む人、ことばによる泥棒」RV X 87,15である様に思わせる（AiG II-1 p.249、OERTEL op. cit.参照）。この一種比喩的表現をGELDNERは「der mit Worten dasselbe tut, was der Diēb mit der Hand, der durch Zauberworte andere um ihr Eigentum bringt」（盗人が手を用いてすることを言葉を用いてする者、呪文によって他人から財産を奪う者）と説明する。vāc-stena-であれば「ことばを盗む泥棒」が先ず理解されるであろうからInstrumental vācā を前肢に用いて意味の限定・明瞭化を図ったと考えれば、この語も格形を前肢とする複合語と認められるであろう。同様の説明はーこの段落の始めに触れた如くーvācārambhāṇa-にもまさしく当てはまる。その様な格形を前肢とする複合語についてはcf. AiG II-1 p.246ー250：§99（Tatpuruṣa）、更に、p.277f.：§109a（Bahuvarihi）；今問題の二語に限らず、これからの語のいくつかには、格形の前肢をもつverbale Rektionskomposita（Typ puram-darā-；AiG II-1 p.201ー213）への模倣が背景にあったとも考えられる。KUIPERの挙げる例から推察されるように、vāc-が子音語幹であることから来るSandhi上の不自由さがvācāを採用することによって避けられる、ということもいくらか与っているかもしれないが、直接的な理由とは思われない。結論として、KUIPERのPrakrit影響説はーārambhāṇa-が「拠り所」しか意味しないのでない限りー延遠と言わざるを得ない。

3.4. 言うまでもなく、ārambhāṇa-はā-rabh「つかまえる」（意味発展により、更に「とりおこなう」「始める」等も）の派生語として「つかまえること」を意味し得る。二次的な-m°（m°）はKausativ及び名詞派生語等のVollstufeにおいてYajurveda等文以来規則的に見られる：例えばārambah-「獲得」MS° Br., -ārambhāṇa-「始め」AB KB PB, 等々。Rgveda以来Brāhmaṇaに至るまで在証されるārambhāṇa-, an-ārambhāṇa-がKUIPER、IIJ 1 p.155ー159の主張する如く“point of support”としてrabh「つかまえる」とは異なる語根rambh「よりかかる」から出自し、「つかまえる」＞「つかまる」
の如き意味展開によらないとしたところで，『a-rabh 「つかえまえる」の派生語としての arambhaṇa- に「つかまえること」が（少なくとも Chândogya-Upaniṣad の時代に）排除されることは有り得ない。

4. 結論：vācārambhāṇam viṅkūra namādheyam は「変様/変容（物）はことばによる捕捉/把握であり，名付けである」と解釈するのが妥当と思われる（辻1953及びHamm の訳がこれにあたる：次項付録の4-Aの組合せ。SCHAYER も同様の見解をとるが，vācārambhāṇam を二語と解する）。以下に手元に調べられる限りの諸現代語訳を列挙して結びとする。

5. 付録：現代語諸訳一覧
左端カラムの表示 □ - □ の説明：

A：vācārambhāṇam を「ことばによる捕捉」(Substantiv) とると

B：-ārambhāṇa- を「拠り所」ととる。

B'：同じく Adjektiv とする

C：その他の意味で Substantiv とると

C'：その他の意味で Adjektiv とする


4-C Max Müller (1897) SBE 1 92f., 95f.
the difference being only a name, arising from speech

1-C BÖHTLINGK (1889) Kândogijopanishad 61f., 63
Eine Umwandlung (Fußnote：D.i. ein besonderes Wort für ein Produkt desselben.) ist eine Wortklauberei. Lehms etc. ist der Name in Wirklichkeit.

4-C WINTERNITZ (1909) Geschichte der indischen Literatur 1 214
… die Verschiedenheit bloß im Worte liegt, bloß ein Name ist

2-B OLDENBERG (1915) Die Lehre der Upanishaden 70
es haftet am Wort, ist eine Umwandlung, eine Benennung (cf. Weltanschauung, 1919, 103 “Haften am Wort”)
4-B/C  Hillebrandt (1921) Aus Brahmanas und Upanishaden [Morgenroth]
die Umwandlung nur ein Behelf im Ausdruck, eine Bezeichnung

4-A  Schayer (1922) Zeitschr. f. Buddhismus 4 219—221 (Rz. Hillebrandt)
[die] Umwandlung [ist eine] Ergreifung durch die Rede [, eine
Bezeichnung] (推定)

4-C  Tuxen (1921/1922) De aeldste Upanishader [Morgenroth]
Omdømmen er en sproglig Konstruktion, en Benævne

3-B  Hertel (1922) Die Weisheit der Upanishaden² [Morgenroth]
Der Name (der einzelnen Erzeugnisse) ist nur ein Anhalt für die Sprache, eine
Entstellung (des wahren Sachverhaltes)

2-C  Keith (1925) The Religion and Philosophy of the Veda and Upanishads 530
(可能性として：) a matter of words, a change, a simple name

4-B  Geldner (1928) Vedismus und Brahmanismus 110
Ein Sich-klammern an Wort ist die Umwandlung, ein bloßer Begriff.

4-C  Senart (1930) Chândogya-Upaniṣad [Morgenroth]
les diverses modifications n en étant que distinction de nom et affaire de lan-
gage et n’y ayant qu’une réalité

4-C  Hume (1936) The Thirteen Principal Upanishads² 240f., 242
the modification is merely a verbal distinction, a name

4-C  Coomaraswamy (1936) HJAS 1 (Carpiani NIA 2 163より引用)
Modification is a matter of wording, a giving of names to things

2-B  Papeso (1937) Chândogya-Upaniṣad [Morgenroth (一部修正)]
(tutto ciò essendo) un appigliarsi alla parola una modificazione un nome

4-B/B'  Deussen (1938) Sechzig Upanishad’s des Veda³ 160ff.
an Worte sich klammernd ist die Umwandlung, ein bloßer Name

2-B  Carpiani (1939) NIA 2 163
(tutto essendo) una pura distinzione verbale (”un appigliarsi alla parola”),
una modificazione, un nome

4-C'  Radhakrishnan (1953) The Principal Upaniṣads 447
the modification being only a name arising from speech

4-A  辻直四郎 (1953) ウェーダとウパニシャッド 219, 221
変異は [唯] 言語による把握（＝語彙上の区別）なり。単に名称なり。
2-C RUBEN (1955)  Begin der Philosophie in Indien 167, 171
(nämlich als) Schöpfung durch die Rede, Umwandlung (des Tons etc.),
Namengebung / (sein Name Feuer etc. ist nur) eine Schöpfung der Rede (des
Seienden), eine Umwandlung (des Seienden), eine Namengebung

1-C VAN BUITENEN (1958) III 2 304
(the Supreme's) creation is (his) taking hold of vāc

(und das) eine Schöpfung durch das Reden, eine Umwandlung, eine Namenge-
bung

4-B' 辻直四郎 (1959) インド集 67
変異は言語に依存する名称なり

3-C EDGERTON (1965) The Beginnings of Indian Philosophy 170, 172
the appellation (of individual manifestations; of any particular product of
earth) is a verbal handle, a modification [p.172: (of the underlying reality)]

4-C ZAEHNER (1966) Hindu Scriptures 105f.
its modifications are verbalizations, [mere] names

2-A THIEME (1966) Upanischaden 44, 46
['Lehmkloß' ist. etc.] eine Bezeichnung (wörtlich: 'ein Erfassen durch die
Rede'), eine Sonderform, eine Benennung (d. h. ein für praktische Zwecke
künstlich geschaffener, sekundärer Begriff)

1-A 岩本裕 （1967） ヴェーダ・アヴェスター 211
変異とは言語による把握である（[「語彙上の区別があるのみ」の意。]。土と
いう名称こそ真実なのである。（p.212：変異とは言語の把握であり、三つの
色という名称こそ真実なのである。）

4-A HAMM (1968) WZKSO 12/13 = Fs. Frauwallner 150, 152
Die Umgestaltung (…) ist ein (sekundäres) 'Be-greifen' mit der Sprache,
eine Namensgebung

3-A 服部正明 （1969） バラモン教典 112, 114（～古代インドの神秘思想，
1979, 130, 133）
名称はことばによる捕捉であり，変容である。

4-C HANEFELD (1973/1976) Philosophische Haupttexte der älteren Upaniṣaden 117
: ChU VI 1,4—6
Redegebrauch ist die Umwandlung [...], eine Namensgebung

2-C HANEFELD do. 121: ChU Ⅳ 4, 1–4
[der Name Feuer ist etc.] Redegebrauch, Umwandlung, Namengebung

2-C 松濤誠達（1980）ウバニシャッドの哲人 190, 193
（「泥のかたまり」というのは）ことばによる表示であり、変形であり、名称である。

4-B’ MEHLIG (1987) Weisheit des alten Indien I 296, 298
so ist die Umwandlung ein bloßer Name, der auf der Sprache beruht

[4-B 宇井伯寿 (1922) ウバニシャッド全書第3巻 p.146
変異は語の据るものにして、名なり、実は泥たるのみ]

4-B’ 佐保田鶴治 (1945) ワッパニシャッド p.274
土路の 個別性 は 語 (發語器官) と手懸りのきたる目 に過ぎなり (短田伸治)

注

(1) Cf. KUIPER, IJ 1 (1957) p.155 “In spite of the fundamental importance of this passage, on which even materialistic dogmatists have founded their claim to be orthodox and in agreement with the śruti, neither the syntactical relation between vācārāṃbhaṇa and the following two words, nor its formation, nor even the exact meaning of -ārāṃbhaṇa- alone is clear. Keith’s remark that ‘the sense of vācārāṃbhaṇa (of dubious formation) is uncertain’ is as true to-day as it was in 1925.”


THIEME, 井狩の指摘通り, adeśa- は Pāṇini の術語ではっきりと「代置物」乃至「代置」を
意味を同じ語詞によってUpaniṣad（及びŚatapatha-Brāhmaṇa）のかなりの用例が解釈可能である。従って、Thiemeの解説（K. Schr. 267）の様に、ādeśa-が「…の場所に位置するものの」＝「代置物の意味でdesa + a「…の場所における」から作られた前置詞支配複合語（präpositionalen Rektionskompositum）である可能性は考えられる；この種の複合語、例えばā-pathi, a-pathi「道の上に存する」についてはAltindische Grammatik II 1 p.312ff.参照。しかし、ādeśa-が他の場所で、動詞a-disの派生語として「指示・教令」をも意味することは否定できない（例えばTaittUp 11参照）、二つの同音異義語を帯びた新しい用例に即して区別することは事実上できない。また、「…のかわりにする」という場合には、本来「地方、方面」を意味したであろうdesa-よりもsthāna-, loka-の方が相応しいのでは（WEZLER, KZ 86 p.12ff.の引用例を参照）、という疑問もある。Thiemeは最終的には断定を避け、「e:was hinweisend, d. h. 'an einen Platz weisen'…'an einen Platz weisen, der bis dahin von etwas anderes eingedenommen wurde'（['あるものを']そこへに向けて指示・指定する」即ち「ある場所へ指示・指定する」…「それまで別のもののが占めていた場所に指示・指定する」）という意味展開の可能性をも挙げている。

動詞a-disからの直接派生の可能性には、むしろ、ādeśa-, a-disがUpaniṣadに於いてA（brahman-, ātman-等の根源的なもの）をB（現象界中の事物）であると述語によって指定・断定する、という文脈で用いられる例が数えられるようにと思われる（井狩, loc.cit. 685—687参照）。更にnamāḍiṣet「名を示すすべき」SB V 2,4,20, nāṃādeśa-「名を挙げること」ŚrŚa. + (cf. Pañ 3 III 4,58), (cf. nāma grabh)も参考となるろう；これらの用例についてはWEZLER, KZ 86 p.8111参照。a-disの用例を詳しく検討したEva TICHIは「第四の（＝「何かを指し示す」から「同一化；代置，代置物；代置する」への）意味展開は、「Xは即ちYである」という形における表現との、文脈的な繋がりから来たものであろう、もし名詞ādeśa-にその説明が求められないべきではないとしたら「Thieme…を参照せよ」と述べる（Münchener Studien zur Sprachwissenschaft 38, 1979, p.171—222：Semantische Studien zu idg. 1. *dei k "zeigen" und / "werfen"；引用はp.189から）。結論として，Pañiniのādeśa-「代置」もこの様なa-disの「[AをBであると]指示し示す」からの意味展開の延長にあると考えるのが妥当と思われる。

問題はUddalaka Aruniのādeśa-が単なる「指示・教令」の意味に止まるのか、より特殊な意味の込められた「指定（…であるという形での）指定、断言」か、それとも既にPañiniの術語にはきっと表れるような「代置，代置物」の意味が意識されているのか、と言うことにあるようにと思われる。もし「代置，代置物」まで行っていれば機知に富んだ言葉の可能性もありよう。井狩loc.cit. 685ff.はVAN BUTIENENの指摘から出発してUpaniṣadにおけるādeśa-の用例を考察しているが、その検討が示すのは、この語が当時の思弁家たちにとって流行的概念とても重要な重要な術語であり、主として「（主に至高存在を）…であると指定・指定・断定すること」（ないし具体的にその内容：[例えば至高存在の]何であるかという断言）を意味した、ということである。とすれば、Uddalaka Aruniの用いるādeśa-の意味もこの領域に求められよう。彼に於いてもādeśa-の字句の意味は、それが至高存在について用いられていないとは言え、依然、動詞a-disから派生する「…であると指定・指定・断定する
こと」、「措定・措定表現、措辞、述語表示、断言」であったと思われ、内容の新鮮性はむしろ彼の物質主義的哲学的内容と抽象的思考方法に起因するものと考えるべきであろう。

(3) Cf. 服部, バラモン教典 p.113 注 3: 「ウッダーラガが語ろうとする神秘的同一化の原理は、第四節の「真にあるものは三種の色にはかならない」ということであって、本節ではそれを説き明かすための例文をあげていると解される」。その際、土が白（: 水）、鋼が赤（: 熱）、鉄が黒（: 食物）の三要素を代表することはLIMAYE / VEDEKAR, Eighteen Principal Upaniṣads (1958) p.136, HAMM, WZKSO 12/13 p.150 注 9 の指摘する通りである。

(4) yathā は最終的にはⅠ1, 6 の evam sonya sa adeśō bhavati 「そのように、我が子よ、その adeśa が成る（機能する/用いられる、または：ある [?]）」に受けられる（HAMM, loc. cit. 150 注 7）。

(5) VAN BUIJENEN は同論文 (p.302及び32ff.) において vi-kr「変容・変質させる、多様にする、分ける等」を vyā-kr「引離す、様に派生・展開・形成する（他動詞）」と同義に解して独自の解釈（“creation”. RUBEN の訳をも参照）の基礎としているが、根拠を見ず。vyā-kr の「(あるものから) 様々に（ものを）作り出す、展開する、派生させる」の用例はすぐ後のChU Ⅲ, 3, 2 に見られる：hantāhām imās tisro devatā anena jivenāmanānuvratīśva nāmarūpe vyākarāvaqi 「よし、私はこれら三神格に、この (= 私の) 生きた命をもって順次入れ込み、名称と形態を形成/展開するとしよう」。動詞 vyā-kr と vyākarana-「文法」についてはTHIEME, Stll 8/9 (1982/1983) p.23ff. 参照。→ CARDONA, Jānini I (1992) 656ff. 注 4「解説」78；解説」390注 10

(6) 語根 dha「置く、据える」の用例に多々現れる「bestimmen」「定める、決定・指定する」の意味を参照。更にヒタイト, トカラ, ギリシア, 古ラテン語に見られるインド・イラン語の nāma dha の対応形に関して KUIPER, Kratylos 32 (1987) p.66も参照のこと。

(7) OERTEL が vācārāmbhāna を 'Es ist (dies) ein Erfassen (des Gegenstandes nicht seiner Essenz nach, sondern nur) durch ein Wort (eine Benennung)', d. h. 'es etikettiert den Gegenstand nur, ohne sein wahres Wesen zu erkennen'（「[これは対象を、その本体によってではなく、ただ] 言葉によって構成すること [名付けること] である」）と解し、「本当の実体を認識することなく、対象にレッテルを貼るにすぎない」と訳しているのは、スインドーの上下から述語名詞と考えていることになるが、彼は単にOLDENBERG の訳（三語を全て述語名詞とする）を材料として、その vācārāmbhāha における部分のみを訂正しようとしたに過ぎない。

(8) KUIPER は The circumstance that vācārāmbhāna- has probably been created as a technical form of the philosophical speculation would seem irrelevant in this respect, as most adeśas, such as tad vanam, adityo brahma, netineti are normal idiomatic phrases. We have no reason to suspect that the case of vācārāmbhāna- may have been different (III 2 p.307) もいうが、このような主張によって "Philosophen-Kompositum" の可能性が否定されるとは思えない。第一、vācārāmbhāna- は KUIPER が VAN BUIJENEN の仮説に従って考えるような "adeśa" の一部を構成する語ではなく、説明中の用語である。即 "Philosophen-Kompositum" という観点から見ると、例えば仏教の基本概念の一つ、pratītya-samutpāda-（pāli paṭicca-samutpāda-）に依っての生起「縁起」に於いて、一種のかみくだいた表現（Paraphrase; 日常語からの影響？）という性格と並んで、哲学上の述語という特殊な条件があるように思われる。
(9) 複合語の前肢に例外的に見られることのある Stammerweiterung (AIG II-1 p.61ff.) 例えば urjād- (Vok.) “Kraftnahrung essend” (urj- + ōd-; cf. AIG II-1, Nachträge p. 21) ad 63/4 をも参照せよ。

(10) おそらく rabh/labh の語根構造の上から “samprastāraya-” Ablaut (ṛbh) が避けられ、例えば VAdj. rabhādh- « rabh-tā-に見られる様に語根に -a- が保持されたことから、この疑似的 Schwundstufe に an, am の Schwundstufe としての a (<m,η>) を連想するアナロジーにより (cf. bandh : baddhā-, stambh : stabdhā-)、二次的な Vollstufe rabh/labh が作られたものと考えられる。


aśām āmēṣu rambhīṇītva rārabhe
kāṣṭeṣu khadīṣ ca kṛtiṣ ca sāṃ dadhe
“auf ihre Schultern lehnt sich (die Lanze) wie (eine Frau), die sich anlehnt. In ihren Händen sind Spange und Schwert (?) vereinigt” (GELDNER)：彼等 (Marutたち) の肩には [槍が] もたれかかっている、もたれかかる [女] のように。彼等の手には腕輪と剣 (?) とが一つになっている。"


名詞 rambhā- の唯一の出典箇所 Ⅳ 45, 20 にも動詞 rARbhMā が並んで用いられている：

ā tu rambhāṁ nā jīvrayo
rārabhMā āvaya śavasas pate
“Wir halten uns an dich wie Greise an den Stab, o Herr der Kraft” (GELDNER)：『我々は汝に身をささえ（てい）る、年寄り達が杖に、の如く、おお力の主よ』。

KUPEK は rarabhām の Akkusativ 支配に注目して、彼の設定する rabh「よりかかる」が早くから rabh「つかまえる」と混同された例と推測している（III 1 p.157）。rarabhām は rabh の Perfekt 1. Pl. と判断されるが（我々は汝をつかまえている＝につかまっている）、Aktiv は独立例である（場合によっては Götō, op. cit. p.67f. の例に参照）。

a・rabh「つかまえる」には、他にも「つかまる、しがみつく」（格支配はいずれもそのまま、つまり Akk. 支配）という用例が十分明瞭に存在する：RV Ⅲ 53, 2

pīrū nā putrāḥ sīcām ā rabhē te

『子が父の（着物の裾をつかむ）ように、私は汝（＝インドラの）着物の裾をつかむ』。

さらに，Ⅰ 133, 6（下に引用）、Ⅰ 57, 4, Ⅰ 34, 2, Ⅰ 182, 7（但しこれ下の引用を見よ）。

「挙り所」を意味するārambhaṇa・も「つかま（え）る所」から導き得る。例えば RV Ⅰ 116, 5（Aśvin の Bhujyu 救出）では「つかまえる所のない」としか訳し得ない a-grabhaṇa・に並置されている：

ānārāṃbhāṇe āpī avatrayethām
anāsthānē agrabhāṇe samudrē

『その際、汝らは勇者ぶりを示した、挙り所の無い、
立つ潮の無い、捕まえる所の無い海の中で』。

Ⅰ 182, 6 では、同様に Aśvin に救出される Tugra の息子が

āvāviddham taugṛyām apsāv ṣaṁtār
ānārāṃbhāṇe tāmasā prāviddham

『水の中に突き落とされた、
挙り所の無い暗闇に突き入れられた Tugra の子を』

と言われ、直接これに続くⅠ 182, 7 では

kāh sūd vṛcās niśthiḥ mādhya ānyaso
yām taugṛ ṣo nāḥhitāḥ paryāśasvaṣvat/ paryāvṛtā mṛgaṣya nataror ivāabbha
ud aśvinā uḥathuḥ śrōmatāya kām//

『いったい潮の只中に、立っていたのは何の木か、
Tugra の子が窮地に陥って、これにしがみついたのは、
空飛ぶ穂の羽翼（または羽毛）を捕まえようとするかのように、
両アシュヴィンよ、汝らは、まさに名声に至るべく、［彼を］引き上げた』

とある。つまり、Tugra の子は「挙り所のない」海の中で、やっとのこと木に「抱きついた、
つかまった」（paryāśasvaṣat）である。ā-rabh と pari-ṣvaj の文脈的な繋がりは次の二つの
Pada の比較からも知られる：Ⅰ 133, 6 sakhītvām ā rabhāmaste 「我々は汝＝インドラとの」
仲間関係をつかまえる（＝にしがみつく、を撫みとする）』～ibid.2 tām tva pariṣvajāmahe
『我々はそういう汝（＝インドラ）を抱きしめる（＝に抱きつく、しがみつく）』。
インド思想史研究  6

[Exkurs I 182, 7c について：GELDNER によれば、Pāda c は um sich daran festzuhalten wie an dem Gefieder eines fliegenden Vogels（あたかも飛ぶ鳥の羽毛に、の如く、つかまる為に しがみつこうとして）（つまり、必死的努力で）の意味で、Pāda ab に連なり、BAUNACK の指摘するように、parāḥ には羽毛と木（Pāda a）の両義が懸けられているという。比例的見て ab と cd をそれぞれ一つの文と考え、c を「あたかも 鳥（空飛ぶ鳥）の羽を掴まえる為のように、つかまえようとするように」、つまり、それほど軽々、易々と救い出した、の謂とも考えられる。]

要するに、KUIPER の指摘する rambh 「よりかかる」は独立の語根としては設定の必要がなく、rabh 「つかまえる」の意味展開の中で説明され得る、という可能性は否定できない。rambhā-「杖/支え」が rabh からの派生語であるとすれば、二次的な -m. は skambhā-「支柱」、skambh 「(例えば支柱が) 突っ張って支える」、stambh 「力む、押しやる、突っ張る、支える」へのアナロジーから生じたと考えられる。意味の上からは、nomen actionis 「つかま（え）ること/ところ」＞ 「(人がそれを/に) つかま（え）るもの」＞「杖/支え」と説明可能であるし、アクセントは直接 skambhā- か、あるいは他の nomen agentis に値った、c 仮定できよう。（KUIPER の「よりかかる」to lean on から出発しても、同様な意味展開を考えないと「杖/支え」は導き出せない。何故ならば、「杖」は「つかま（え）られる」ものであると同様、「よりかかられる」ものであるから。あるいは、あくまで KUIPER の意を汲むながら、彼の rambh の本来の意味を「支える」と修正すべきか：nomen agentis 「支えるもの」？）ārāmbhāṇa- の -m. も同様に説明できるし（cf. skambhāṇa-「支え、支柱」），あるいは Rgveda の段階で既に、注錄に述べた様な過程が全体として（場合によっては上述のようにして先に生じていた rambhā-「杖/支え」の支援を得て）起こっていた、と考えることにも何ら障害はない。

語根 rabh, labh の発展史については、GOTO，印仏研 24-2, 1976, p.1015－1007（Jubilar の下に提出した修士論文に適る）」をも参照のこと。（現論考は同論文を補う意味のものである。）
<table>
<thead>
<tr>
<th>ChU VI 1,4-6;4,1-4</th>
<th>1.1. +</th>
<th>RV II 53,2c</th>
<th>注 10 11</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>VI 3,2</td>
<td>注 5</td>
<td>VIII 45,20ab</td>
<td>注 10 11</td>
</tr>
<tr>
<td>VI 8,4</td>
<td>2.1.</td>
<td>X 125,8ab</td>
<td>注 10 11</td>
</tr>
<tr>
<td>ŠB XII 2,4,1</td>
<td>3.2.</td>
<td>X 133,2e; 6b</td>
<td>注 10 11</td>
</tr>
<tr>
<td>RV I 116,5ab</td>
<td>注 10 11</td>
<td>pratītya-samutpāda-</td>
<td>注 8</td>
</tr>
<tr>
<td>I 168,3cd</td>
<td>注 10 11</td>
<td>vācāstena- (RV X 87,15)</td>
<td>3.3.</td>
</tr>
<tr>
<td>I 182,6ab; 7</td>
<td>注 10 11</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>
STUDIES IN THE HISTORY OF INDIAN THOUGHT
(INDO-SHISÔSHI KENKYÜ)

SPECIAL ISSUE
DEDICATED TO PROFESSOR MASÅKI HATTORI
ON THE OCCASION OF HIS RETIREMENT FROM KYOTO UNIVERSITY

No. 6 November 10, 1989

CONTENTS

Preface ............................................................................................................................... 1
Academic career ................................................................................................................ 3
Bibliography ...................................................................................................................... 6

Essays

YAMAKAMI, Sh.: The Carvāka theory alluded to in the Nyāyabhūṣaṇa ..................................... 19
TAKENAKA, T.: The Theory of 'Universal' in the Bhāṭṭa School ——
A Japanese translation of the Śāstraṭītipikā with exposition (VI) .................................. 31
MOTEGI, Sh.: Anumāṇa in Sāṃkhya ............................................................................... 41
SHÔSHIN, K.: For whom is the Gītā intended? —— A view-point of the orthodox school inside the history of Gītā-interpretation ................................. 53
AKAMATSU, A.: A Study of the Nyāyavārttika (1)
—- tattvajñānān niḥśreyasādhiṣṭanam ........................................................................ 67
KURODA, Y.: On the Jataṭprabhākarah ........................................................................... 77
YAITA, H.: Definition of pratyakṣa in a Handbook of the Buddhist Epistemology ................. 95

KANÔ, K.: Proofs for the Existence of Īśvara and puruṣa ................................................ 105
YANO, M.: On kṣayamāsa .................................................................................................. 119
EINO, Sh.: A Story of Kirtimukha ...................................................................................... 127
GOTÔ, T.: vācārāmbhānam vikāro nāmadheyam ............................................................... 141
IKARI, Y.: Some Aspects of the Idea of Rebirth in Vedic Literature ................................. 155
TOKUNAGA, M.: Devagānas in the Epico-Purānic Literature ............................................. 165
YAGI, T.: Le Mahābhāṣya ad Pāṇini 6.4.22-57 — un essai de traduction(II) ...................... 181

Postscript .......................................................................................................................... 192

Society for the Study of the History of Indian Thought
c/o Department of Indian Philosophy,
Faculty of Letters, Kyoto University